時評

ジョークだろうか

矢部雅之

シカゴ、ペニンシュラホテル。一月二十日十六時前(現地時間)。中国の胡錦濤国家主席の到着予定時刻の三十分以上前なのに、ホテル前には、既に約五百人の中国人が集まっていた。沿道の柵には「熱烈歓迎」「中美友好」等の赤い垂幕が掲げられ、龍舞や太鼓で早くも盛大な盛り上がりだ。一方、交差点の反対側には、法輪功とチベット支持派の反中メッセージが対峙する。更に、歓迎要員の地元高校のマーチングバンドも到着。制服姿で、あまり厚着の出来ない彼らは見るからに寒そうだ。こうして一帯は、歓迎派反対派野次馬警官隊、計千人以上の人で埋まった。

だが待っても待っても胡主席は来ない。到着予定時刻は過ぎている。天気予報では氷点下十八度とのことだがビル風で体感温度は遥かに低い。寒いを通りこして痛い。到着予定時刻を確認しようと広報担当者の携帯に電話をかけた同行のプロデューサーが、「どうして主席の日程をメディアなんかに話さなければならないんだ」とキレられたと苦笑する。本音はそうだろうが、広報担当がそれを言うって、何かのジョークだろうか。そして十七時過ぎ。中国人がバラけだした。「胡主席は別ルートを通り裏口から既に中に入ったそうだ」という。待ちぼうけを食ったマーチングバンドは、せめて主席の耳に届けとばかり歓迎曲を盛大に吹き鳴らす。歓迎の為に寒さに耐えて待っていた地元の子供達に姿もみせないって、何かのジョークだろうか。歓迎派反対派ともに、胡主席の次なる予定である、十八時半からの晩餐会の会場、ヒルトンシカゴに向かい始める。私達も後を追う。ヒルトンシカゴに到着した時には既に日は暮れ、周囲は真っ暗。だが、胡主席を歓迎しようと待ち受ける中国人約五百人の姿があった。中には、父母に抱かれたり手をつないだりしながら、風船や小さな五星紅旗を手にした幼子達の姿も。米国に暮らす彼らには、母国を身近に実感できる貴重な機会。同じく異国で子育てをする身にはジンとくる。

だが待っても待っても胡主席は来ない。到着予定時刻はとうに過ぎている。華氏で零度を下回る寒気はそうそう体験できない。自分の口髭に違和感を覚えて擦ってみると、バリバリと音がして手袋の表面に氷の粒が。呼気の水分が髭の上で凍りついていたのだ。

そして十九時過ぎ。また中国人がバラけだした。「胡主席は別ルートを通り裏口から既に中に入ったそうだ」と言う。歓迎の旗を振るのを楽しみにしていた幼子らの前に姿も見せないって、何かのジョークだろうか。中国人の流れに乗ってしばらく歩く。沿道のホテルの職員が子供達を気遣い声をかける。

「みんな、楽しめたかい?」「うん!」

その表情ときたら、本当に嬉しそうなのである。見守る親達も皆笑顔で、何台もの動員用大型観光バスに続々と乗り込んでいく。

酷寒の中に愛児まで動員された挙句に無視されて、文句一つ言わず笑顔で引き上げるって、何かのジョークだろうか。民主国家ではありえない事態だ。彼我の体制の違いと、そこでの、一人一人の人間の存在の重さの違いを改めて思い知らされた。

ただその一方で、この夜、中国の人達が示した忍耐と自制と寛容から、人として多くを学ばなければ、と思ったのも確かである。